

新型コロナウイルス感染症や令和2年7月豪雨、熊本地震からの復旧・復興に向けた「重点10項目」など、県政の主な動き、将来に向けて夢や希望を与える出来事、県政課題の解決に向けた取組みを積極的に進めたものを選びました。

◎新型コロナウイルス感染症対策に全力

重症者が増加し病床が逼迫した「第3波」、デルタ株の影響により過去最大の感染拡大となった「第5波」など、今年も猛威を振るった新型コロナウイルス感染症に対し、「初動は迅速に、解除は慎重に」という考えのもと、飲食店等の営業時間短縮要請などの強い対策を、先手先手で実施し、早期収束を図るとともに、感染拡大防止と地域経済や県民生活の回復という2つの目標のベストバランスを追求した。

【感染拡大防止】感染拡大に対応できるよう、更なる医療体制強化を図った。今年初めの時点では420床だった入院病床については、緊急時には最大806床を確保。宿泊療養体制も、140室から1,000室に増やし、往診などの健康管理体制を強化した。

新型コロナ対策の切り札であるワクチン接種では、8月～11月に、夜間・休日にも接種が可能な「県民広域接種センター」を開設。全国と比べて早いペースで接種が進んだ。また、KMバイオロジクス株式会社が開発している不活化ワクチンについて、本県が国に要望した「早期実用化に向けた治験の簡素化」が認められ、新たな治験が進んでいる。今後も、一日も早く承認・実用化されるようできる限りの支援を行っていく。

【経済・生活の回復】経済的な影響を受けた事業者の方々に対し、営業時間短縮要請協力金や、事業継続・再開支援一時金などにより迅速な支援を行った。6月には、県内統一の基準による飲食店認証制度を創設。認証店の数は6千店を超えた。ベストバランスの実現に向け、第5波の際には、認証店への時短営業の緩和等を認める措置を講じた。また、コロナ禍で需要が大きく落ち込んだ観光業界の支援のため、3月から、県内旅行助成事業「くまもと再発見の旅」を実施。感染拡大時には事業の停止も行ったが、10月から事業を再開。これまでに予約も含めてのべ31万人を超える県民の方が利用された。

◎令和2年7月豪雨から1年

球磨川流域を中心に甚大な被害をもたらした令和2年7月豪雨から1年を迎えた。八代市、人吉市、芦北町、津奈木町、球磨村の5市町村において、県との共催で、犠牲者追悼式を開催。犠牲になられた方々を悼み、二度とこのような被害を起こしてはならないという決意を新たにした。

最重要課題である「すまいの再建」については、11月末時点で、仮設住宅に1,460世帯の方が入居。熊本地震での経験を活かし、県独自の支援策や、地域支え合いセンターによる訪問活動など、被災者に寄り添ったきめ細かな支援を進めている。被災家屋の公費解体についても、11月末時点で約96%完了し、順調に進んでいる。7月～10月には、知事が仮設団地を訪問し、被災者の皆様の思いを直接お聴きし、「緑の流域治水」の考え方や県の支援策などについて丁寧に説明を行った。

「なりわいの再建」では、7月に、球磨川くだりの再開に向け、観光複合施設「HASSENBA」が開業。さらに11月には、全線不通となっていたくま川鉄道が、肥後西村駅から湯前駅までの部分運行を開始。被災から約1年5ヵ月ぶりに人吉球磨地域に鉄道が戻り、復旧に向けた大きな一歩となった。

道路・橋梁は、国の権限代行等により復旧が進められており、5月末までに流失した10の橋梁のうち4つの仮橋（西瀬橋、相良橋、鎌瀬橋、坂本橋）が完成した。また、7月末には、大野大橋から人吉方面までの国道219号で、一般車両の通行が再開されるなど、着実に豪雨災害からの復旧・復興が進んでいる。

また、11月に開催したくまもと復旧・復興有識者会議では、五百旗頭座長をはじめ有識者の皆様から、様々な御意見や御提案をいただいた。

◎「緑の流域治水」を推進

3月に、「緑の流域治水」の全体像といえる「球磨川水系流域治水プロジェクト」を策定した。

プロジェクトに沿って、流域住民から特に要望が多かった河川の堆積土砂撤去については、5月末までに完了。また、田んぼダムの実証実験などの取組みも進めている。

国は「新たな流水型ダム」について調査・検討に着手。12月には、国からダムの位置や高さなどの諸元の一部が示された。なお、住民の安全・安心を最大化し球磨川の環境に極限まで配慮するため、県は国に対して法に基づく、あるいはそれと同等の環境アセスメントの実施を要請し、5月に国が法と同等のアセスメントを実施することを表明。12月には、環境影響評価法の配慮書に相当する環境配慮レポート案が示された。

球磨川水系の河川整備基本方針については、12月に、令和2年7月豪雨を踏まえ、気候変動による影響を考慮するとともに、県が進める「緑の流域治水」の理念が盛り込まれた内容に変更された。今後は、この新たな基本方針を踏まえ、国と連携し、一日も早く河川整備計画を取りまとめていく。

また、熊本県立大学とともに、「緑の流域治水」の理念の下、持続社会の形成を目指す“地域共創拠点プロジェクト”（「流域治水を核とした復興を起点とする持続社会」地域共創拠点）を本格的に始動。今後、これらを基に、創造的復興に向けた取組みをさらに加速させていく。

◎阿蘇への主要アクセスルートがすべて復旧

3月に新阿蘇大橋が開通し、熊本地震から5年という異例のスピードで、阿蘇への主要なアクセスルートがすべて復旧した。この開通効果を最大化するため、昨年引き続き、阿蘇地域の観光キャンペーン「I'm fine! ASO」を実施。10月にはその一環として、阿蘇の魅力をPRするための新しいWEB動画「阿蘇の不時着」を公開した。You Tubeでの再生回数は66万回を超えている。ラストシーンに登場するミステリーサークルは実際に西原村に出現し、阿蘇の新たな観光名所となった。

阿蘇くまもと空港では、1月から国内線・国際線一体型の新たな旅客ターミナルビルの工事が開始。開業予定の2023年春には、魅力的な空の玄関口を拠点に、熊本へ更なる人の流れが生まれることが期待される。

10月に阿蘇中岳で火砕流を伴う噴火が発生し、約5年ぶりに噴火警戒レベル3が発表された。しかし、農業や観光業などへの目立った影響もなく、阿蘇の復興は力強く進んでいる。

◎復興のシンボル「熊本城」の天守閣が復旧

熊本地震で甚大な被害を受けながら、少しずつその雄姿を取り戻してきた熊本城。3月にはついに天守閣の復旧工事が完了した。新型コロナウイルス感染症の影響で延期されていた天守閣内部の一般公開も、6月からスタートした。天守閣内部の展示は、多くの体験型展示を設置するなど全面リニューアル。また、バリアフリーにも配慮されており、訪れる方誰もが心地よく楽しめる空間となった。着実に復旧の歩みを進める熊本城の姿は、まさに震災から力強く創造的復興を遂げる熊本のシンボルとなっている。

◎漫画「ONE PIECE」麦わらの一味の像が続々完成！

～マンガ・アニメコンテンツで地域の活性化へ～

『ONE PIECE 熊本復興プロジェクト』で進めている漫画「ONE PIECE」麦わらの一味の像に、7月にナミ像、10月にロビン像が加わり、これまでに8体の像が設置された。さらに、12月には、阿蘇くまもと空港に全長30メートルを超える巨大な「麦わらの一味」の壁面パネルを設置し、熊本を訪れる皆様をお出迎えしている。

また、4月には、人吉球磨地域がモデル地のアニメ「夏目友人帳」とコラボし、動画「夏目友人帳～人吉・球磨での優しい時間～」を公開。7月には、「クレヨンしんちゃん」の野原一家が、母・みさえが阿蘇市出身という縁から、「くまもとふっこう応援隊」に就任。10月から阿蘇の観光スポットなどをめぐる「クレヨンしんちゃん」のデジタルスタンプラリーを実施している。

マンガ・アニメを活用した取組みが進む中で、10月に、産学官が連携して「マンガ県くまもと」を目指す「くまもとマンガ協議会」が発足。また、11月に、県立高森高校に、2023年度から全国初のマンガ関連学科を新設することが決定。今後、マンガ・アニメを第二のくまモンとすべく、様々な関係機関と力を合わせ、「マンガ県くまもと」の実現に向けた取組みを推進していく。

◎持続可能な社会に向けた取組みが進む

3月に、「新しいくまもと創造に向けた基本方針」及び「第2期熊本県まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定。SDGsの理念を全ての取組みの指針として位置付け、その理念に沿った取組みの加速により、持続可能な「新しいくまもと」を創造することを示した。

7月には、「環境立県くまもと」の実現に向け、温室効果ガス排出削減目標や具体的取組みなど環境施策の方向性等をまとめた「第六次熊本県環境基本計画」を策定。

これらの方針等により、県民が安全・安心で豊かに住み続けられる持続可能な社会の実現に向けた取組みを進めている。

また、1月には、SDGsに積極的に取り組む企業や団体を後押しし、県内におけるSDGsの取組みの裾野を広げるため、「熊本県SDGs登録制度」を創設。8月には、第1期の登録事業者として442者を決定した。

◎東京2020オリンピック・パラリンピックで県勢選手が躍動！

新型コロナウイルス感染症の影響で1年延期となっていた、東京2020オリンピック・パラリンピックが開催。過去最多となる25名の熊本県ゆかりの選手たちが出場した。コロナ禍という逆境のなかでも、諦めることなく努力を重ね、代表の座を勝ち取った選手が奮闘する姿は、すべての県民に勇気と元気を与えてくれた。

オリンピックでは、野球競技で村上宗隆選手が、最年少ながら全試合に先発出場を果たし、金メダル獲得に大いに貢献された。パラリンピックでは、富田宇宙選手が、水泳400m自由形等で銀・銅3つのメダルを獲得。県民に大きな夢を与えてくれた功績をたたえ、村上選手、富田選手には「くまもと夢づくり賞」を贈呈した（※村上選手への贈呈式は12月28日に開催予定）。

また、車椅子ラグビー競技で銅メダルを獲得した島川慎一選手、乗松聖矢選手、ゴールボールで銅メダルを獲得した浦田理恵選手に「熊本県スポーツ特別功労賞」を贈呈した。

◎台湾半導体メーカーTSMC が熊本への新工場建設を決定

台湾の世界最大手半導体企業TSMCの日本で初めての工場が、菊陽町に建設されることが11月に決定。この国家プロジェクトでもある新工場建設を円滑に進め、県全体へとその波及効果を高めていくため、県では直ちに「半導体産業集積強化推進本部」を設置。人材の育成・確保、渋滞対策などの課題解決や、熊本の可能性を広げる取り組みを、スピード感を持って進めていく。

また県では、半導体、自動車関連産業に続く「第3の柱」として、新たな産業群を創出すべく、「UXプロジェクト」を進めている。空港周辺地域を拠点に、本県の強みである医療、介護、健康、食、ビューティ、スマート農業など、ライフサイエンス分野を中心とした「知の集積」を図っていく。4月には基本構想、10月には基本計画を策定した。

これらの取り組みが、熊本地震からの創造的復興を目指す本県にとって、50年後、100年後の発展につながるよう、全力で取り組んでいく。

◎鳥インフルエンザ発生 72 時間以内に防疫措置完了

12月に、南関町で、県内では5年ぶりとなる高病原性鳥インフルエンザが発生。厳しい寒さと多くの困難が伴う厳しい条件のなか、延べ1,614人の職員が現場での防疫作業に従事した。一時は24時間以内の殺処分は難しいかと思われたが、職員の強い使命感と、現場での創意工夫、作業手順や体制の見直しにより、早期封じ込めの目安となる「24時間以内の殺処分完了(66,225羽)」と「72時間以内の防疫措置完了」をいずれも達成することができた。

【プラス1項目】

◎くまモン今年も大活躍

今年もくまモンが熊本の元気のために大活躍。7月には、令和2年7月豪雨により甚大な被害を受けた人吉・球磨地域を応援するため、くまモン自らがプロデュースした『くまモンの「みんなサンくま」プロジェクト～人吉・球磨は元気だもん♪～』を実施。スタンプラリーやステージ企画などの多彩なイベントを開催し、力強く復興する人吉・球磨地域をPRした。

東京2020オリンピック・パラリンピックの際には、くまモンが、オリンピックのエンブレムカラーでもある「藍色」に大変身。みなぎるパワーで頑張るすべての人々を応援した。

さらに11月には、くまモンがインドへ初進出。JICAとの国際協力等に関する連携協定の一環で、JICAが進める衛生啓発の取り組み「アッチー・アーダトキャンペーン」に協力し、手洗い動画に出演した。

くまモン利用商品の売上げも好調で、2月に公表した2020年の売上高は1,698億円超で、9年連続で前年売上高を更新。これまでの累計は9,891億円となり、目標としている1兆円の大台にもあとわずかとなった。